

## 母親の訴えにみる三歳児の諸問題

鈴木 裕子

(昭和59年10月15日受理)

### The Problems of 3 Year-Old Children, examined in Their Mother's chief Complaints Yuko Suzuki

(Received October 15, 1984)

#### はじめに

日々成長・発達をとげる子どもの姿は親や周囲の人々にとって限りない喜びであるとともに、ある時には自分の幼ない頃の姿を重ねて郷愁にひたり、過ぎた日々を懐しく思いおこしてみたりするものである。

子どものすこやかな成長・発達の様相については、教育・心理・福祉・医学・文化…など、各方面からのアプローチによって科学的な研究による成果が次々と発表されてきており、出生後、または胎生期からの問題も含めてその進歩は近年ことに目ざましいものがあると言える。子どもの順調な成長・発達を願う私たちにとってその過程が明確に呈示されることは、子どもについての正しい理解をうることに、また子どものたどる発達の道すじの見通しをもつことに多大な役割を果たしており、子どもの健全な成長を保障し、助長することにつながっていくものであると思われる。

昔から「三つ子の魂百まで」をはじめ、子どもの成長・発達に関する言い習わしは数多くみられる。それらは日常生活体験に基づいたものであろうが、一人一人の子どもの特性を大切にすることであり、合わせて幼年期の養育環境の大切さを示唆する言葉として伝えられてきているようである。人間の生涯が幼児期のみで規定されるとは断定できないまでも、後に認められる行動様式の萌芽はこの時期にすでに認められ、幼年期をとうしてその後の方向づけがなされるということも否定できない事実なのである。

子どもの生命の維持が養育上の大きな関心事であった時代には、日々の子どもの無事な成長の姿が願いであり

児童学科

それにまつわる様々な行事もなされていたようである。今でもその名残りをとどめてひき継がれているものがお宮参りや七五三に代表されるであろう。

現在では乳児死亡も少く、一カ月検診・6カ月検診・1歳半検診・3歳時検診に代表されるように(地域によって実施時期は多少異なっている。)保健指導の拡大により子どもの健康管理・診断、そして指導と、その充実がはかられ、昔のような危機感はなくなってきたといえる。

このように折々の援助をうけながら元気に成長・発達をとげた子どもは、3歳になる頃には身体的に安定した状態となり、言葉や行動も流暢となり幼児期前期の終りとしての姿を呈するようになる。一見何でもわかっているような3歳児の様子をみると、つい背伸びをさせてしまったり、他の子どもとの比較を試みたりということも少なくないようである。しかし、忘れてならないのは3歳はやはり3歳なりの成長・発達を示すのであり、個人差をふまえ、それまで培われた子どもの歴史をふまえた働きかけが必要な時期であるということである。

健全な発達を遂げている子どもたちが多いのは当然ながら、中には様々な理由で発達上のつまずきや、寄り道をしている子どもの姿に出会うこともある。問題を潜在化または顕在化させている子どもに出合った時には、子ども自身や子どもをとりまく環境についての情報を収集し、その根源にあるものを探り、どのように対応していくことがその子どもにとって最良の道であるかを検討していくことが必要である。

子どもの様々な側面の発達のメカニズムを理解していることはそのうえにも大切なことであると考える。

そこで、ここでは3歳という年齢がどのような特性を

もつ年齢であるのか、乳児期との関わりをふまえその特徴を整理し概観すると共に、何らかの理由で成長・発達  
の片よりを示している子どもたちについて、母親からの  
主訴をもとにその特徴や片よりの原因と考えられる事柄  
について考察をすすめていこうとするものである。

### 3歳までの発達

生理的早産といわれる人間の誕生から、新生児期・乳  
児期・幼児期と時間的経過とともに個体は充実され、よ  
り一層の成長をめざして歩みを続けていく。

人間は出生後無防備な新生児期を過すことになるが、  
この時期は周囲の大人の生理的介助を最も必要とする時  
期であり、生得的・根源的な根拠を除々に消失しつつ、  
人間としての歩みを始める時期といわれている。

モロー反射を始めとする外部刺激に対応して生ずる生  
得的な原始反射は徐々に消失していく過程をたどる。

また、微笑反応等外部刺激に依存しない内的欲求に基  
づく原始的な反応も認められる。

この生得的で自発的なくり返しみられる反応には、人  
を求めて活動する対人関係の源を見出すことができる  
といわれている。人に抱かれる、微笑みかけるとい  
うことをとうして人と関わっていこうとする社会的な働きが、  
人間として生まれた時点ですでに備わっているとい  
うことを示しているのである。乳児の潜在的な要求に基  
づく偶然的な母親との関わりも、たび重ねられていくうちに  
今度は乳児の意志のある行動へと転換され、人を求めて  
泣いたり、笑ったりするようになっていくのである。こ  
こに母と子の相互作用の成立が認められるのである。人  
間の最初の内的欲求に基づく反応には、人間が社会的な  
動物として生きていこうとする能力の芽がすでに内在さ  
れていることや、母親の育児行動の重要性が示唆され、  
乳児期の人的環境の重要性が認められる。子どもの発達  
していく姿は子ども自身と環境との相互作用による結果  
であり、自分の活動が相手に適格に受け入れられると活  
動性は増大するという特徴があり、子どもからの働きか  
けに答える姿勢が活動性をひき出す要因となり、諸々の  
発達を助長することになっていくのである。

このように母子共生時代から誕生という別々の個体と  
しての生活を経起として、相互交渉の大切な時期が開始  
されるのである。母性行動は子どもからの信号によって  
発動することが多いといわれるが、働きかけに応答する  
と共に、母親からも働きかけるという相互の関わりを密

度が質的に高められていくことが必要であり、この過程  
を経て子どもは社会の一員として生きていくための様式  
や情報を受けとって行くのである。原始反射や生得的行  
動に始まる乳児期の行動にかわり、社会・文化的な行動  
が獲得されていくのである。

さらに新生児期や乳児期では混沌とした中で感覚・運  
動・知覚・言語・認知等が未分化の状態で芽ばえ互いに  
影響し合いながらそれぞれの経験や学習を促進させてい  
くのである。

このように乳児期に培われたことを土台として、幼児  
期前期ではさらに飛躍的な発達を遂げていくのである。  
それは直立歩行の確立と言語の獲得という二大特徴に代  
表され、大人社会の仲間入りを果たす時期ともいえるの  
である。

歩行については平面的な移動にとどまらず、より立体的な活動が可能となり、あわせて手指の運動も微細な動きが可能となるのである。

言語に関しても単なる語彙数の増加だけでなく、内容的な変化が認められ、文節をもった流暢な言語活動と一層の内容の充実、活発化が認められる。

幼児期前期は発達のどの側面においても加速的な発達期にあるが、とりわけ運動と言語の発達は子どもの生活空間の拡大をもたらす重要な要因となっているのである。探索活動が可能となり、知的好奇心を旺盛にすることによってさらに高次の活動を促すという循環をもたらすことになる。子どもにとっての未知の外界は彼ら自身の体験をとうして自分の中に取り込んでいくのである。そのための活動は大人からは旺盛にして「いたずら」という側面からのとらえ方が多く、活動の禁止や制限を受けることが多い。しかしこの過程は子どもの発達には必要な一過程であり、大人の利害や価値観によるマイナス面を強調せず、広い目で子どもの活動を認めていくことが好ましいのであり、体験的な学習の循環を円滑におし推めるためには養育者との信頼関係が基盤になるのである。養育者との密接な友好関係の中で子どもは無理なく自分と他者との存在を認識することができるようになるのである。このような過程を経て自我が芽ばえ形成されていくのである。

自発的な行動への母親の適切な対応は子どもの自発性を一層助長させ、やがて自立へと歩みをすすめていくことになるのである。成功体験と高次の欲求への動機づけは幼児期の課題の克服を無理なくすすめる必要条件とな

母親の訴えにみる三歳児の諸問題

表1 幼児用心理検査一覧

		検査名	適用年齢	備考		
発達検査	臨床検査	ヘルブルック：ミュンヘン機能的発達診断法	0：0～1：0	障害診断(未)		
		MCCベビー・テスト	0～2：6			
ゲゼル：発達診断学		0～5	(未)			
遠城寺式乳幼児分析的発達検査法		0～7：6	質問紙含む6領域			
愛研式乳幼児精神発達検査		0～7				
牛島式乳幼児簡易検査		0～8				
京都市児童院式(K式)精神発達検査		0～10	動作性、言語性別			
牛島式知能判定検査		2～6	精神薄弱児判別			
山下式幼児発達検査		2～6				
幼児精神発達検査器		2～7				
言語不用知能検査		2～10				
田中ヒネー式知能検査		2～成人				
1970年新訂田中ヒネー式知能検査		2～成人				
T K式田中ヒネー知能検査		2～成人				
鈴木ヒネー式知能検査		2～成人				
愛研式幼児総合精神検査		3～9				
武政ヒネー式知能検査		4～13				
W P S I 知能診断検査		3：10～7：1	言語性・動作性別。それぞれいくつかの下位検査からなり、下位検査ごとに発達得点が出せる。			
W I S C 知能診断検査	5～15					
W I S C - R 知能診断検査	6～16					
発達検査	単一検査・その組み合わせ	大脳式精薄児用知能検査器	1：10～6	積み木模様		
		大脳式多面的発達検査	2：6～6			
		マッカーシー認知能力診断検査	2：6～8：6	学習障害の診断		
		I T P A 言語学習能力診断検査	3～8	言語障害の診断		
		絵画語い発達検査	3～10			
		グッドイナフ人物画テスト(DAM)	3～10			
		フレディ、シャビュイ：迷路テスト	3～成人			
		教研式ピクチャ・ブロック知能検査(P-Bテスト)	4～7	積み木模様と絵画完成		
		フロスティック視知覚発達検査	4～8	学習障害の診断		
		コース立方体組み合わせテスト	6～成人	積み木模様		
		大脳式盲人用知能検査器	6～成人	積み木模様		
		荒川・古版式運動能発達検査	3～6			
		間藤式運動能発達検査	3～6	(未)		
		狩野・オゼレッキー式運動能発達検査	4～成人	(未)		
		発達検査	質問紙	津守・稲毛式乳幼児精神発達質問紙	0～3 3～7	全体的発達をみる5分野
				社会成熟度診断検査	3～6	
				教研式幼児社会性発達検査	3～7	
				A B S 適応行動尺度	3～12	
非発達検査	臨床検査	太郎・花子テスト	3～6			
		中式指テスト	3～7	発達程度の判定可(未)		
		言語障害児の選別検査(ことばのテストえほん)	幼～小低学年	スクリーニング用		
		幼児クレペリン検査	幼～小2			
		児童用P-Fスタディ	4～14	欲求不満への反応型をみる		
		絵画統覚検査：ベラック版CAT	幼・児	T A T の児童版		
		〃ベラック版CAT-H	幼・児	〃		
		〃早大版CAT	5～10	〃		
		〃国際版CAT	5～10	〃		
		児童用ベンダー・ゲシタルト・テスト	5～10	器質障害の判別、発達程度の判定も可		
		グラッシー・テスト	幼～成人	器質障害の判別		
		バウム・テスト	幼～成人	木の絵を描かせる		
	ロールシャッハ・テスト	幼～成人				
	非発達検査	質問紙	幼児・児童性格診断検査	幼～小6		
			T K式P O T 両親意見診断検査	幼		
			親子関係診断検査	幼～高3		

1. 幼児(5歳以下)に適用可能な個人検査のうち、定まった手引書が日本で発行されている代表的検査をあげた。ただし、6歳以上を対象とする検査であっても、幼児用検査と直接連結するものは採録した。
2. 「発達検査」とは、発達得点を算出する検査をいう。「質問紙」は、親または保育者が記入するもの。「単一検査」とは、ただ一種類の検査材料を用いて発達得点が算出されるものをいう。
3. 各欄で、テストの掲載順序はおおむね適用下限年齢とした。下限年齢が等しい場合は上限年齢順とした。
4. 備考欄の(未)印は、検査用具や用紙がまだ市販されていないことを示す。(子どもの生活世界研究会編 発達と診断) 発達VOL.1 NO.1 P.83より転載

るのである。

また成長の過程をたどってみると、精神的にも身体的にも何らつまづきのない子どもの場合には、一つ一つの過程を確認しきれない程に複合的にからみ合いながら通過していくのである。しかし何らかの理由で寄り道や足踏みをしている子ども達の姿は、実に明確に育ちゆく姿を我々に呈示してくれる。

このような子どもの成長・発達の様子を客観的にとらえようとする道具として検査がある。

表1は乳幼児期より適用できる検査の一覧表である。検査については賛否両論様々な考え方があるが、発達の程度の判定や診断場面等で有効な資料を提供してくれることもあり、面接と合わせて用いられることもあるためここに掲げておく。

子どもの示す問題を考え診断していく場合、観察という手段だけにとどまらず、観察結果の裏づけを得ることや、今後の指導の見通しをうるためには具体的かつ客観的な資料が必要なことがある。検査そのものの特質や限界をふまえ、子どもの状態を考え合わせて併害のない活用を考えていくことが大切である。

以上のように3歳までの子どものいくつかの特質を述べてきたが、我々が子どもの問題を考えていく時、それぞれに歴史をもった子どもであることを十分に認識し、子どもの示す問題を把握することが必要である。

一人一人に適用されるメジャーをもつことが何より大切なのである。

次に、実際に3歳でどのような問題が呈示されてくるのか資料をもとにその内容について検討していく。

### 方法および手続

1 対象 T市の3歳児検診に来所した母子のうち、何らかの理由で発達上の問題を母親が訴え、相談室に来室した母親と子どもである。

子どもの年齢は3歳1カ月から3歳2カ月である。

資料の不備なものを除き、185名の記録を資料とした。

2 期間 昭和54年5月から昭和58年12月

3 方法 母子の入室後、子どもにはすでに用意されている遊具や絵本で自由に遊ぶよう誘いかける。

室内に抵抗を示したり、なかなか慣れない子ども、また母親から離れない子どもには母親も一緒に遊びに参加してもらい心的緩和をはかる。

子どもが周囲の状況に適応できてから母親との面接を

開始する。

4 内容 主訴について母親からの話を聞くとともに、生育歴・現在の状態・母親の接し方・家庭状況など、問題の理解、原因の究明、今後の見通しをたてるために必要と思われる事柄について質問し回答を得る、その内容はすべて記録票に記載しておく。

5 経過 主訴またはそれをとりまく問題の内容や、子どもの様子などについて、子どもの観察・母親との面接をとうし把握し今後の見通しをたてていく。

一回の面接のみで終りにする場合、何回か母親との面接を継続的に続けて問題の解消にむけて方向づけをしながら母親とともに積極的に関わっていく場合、また先にあげた発達検査等、医学的な検査も含めて子どもの現状の把握、症状の理解、今後の方向づけのために必要な資料を得るために検査の実施を依頼し、その結果によって今後の関わり方を決める場合、さらに問題が大きく、子どもにとっても定期的に特定の治療機関の指導が望ましい場合には、しかるべく治療機関と連絡をとって治療指導をお願いするなど、ケースに応じてそれぞれに必要な対策を講じる。

### 結果および考察

作成された個人記録をもとに具体的な主訴内容についてまとめたものが表2である。具体的な内容の欄には親からの様々な訴えを頻度の高い順に並べたものである。

母親からの主訴の中では言語に関するものが44.8%と最も多く、2位のくせに関するもの16.22%をはじめ、以下の他の領域のものより極立って高い頻度で訴えられることが特徴である。

つまり3歳の時点では、言語に関することが母親の関心が高いといえる。具体的内容をみると発音に関すること、文章形態に関すること、どもるや話さないなどの言語態度に関することなど多岐にわたって認められる。

言語は同年齢の他児とも比較対象されやすいものであり、他の子に比べて遅い問題視されやすい傾向がある。

また、言語の問題は単なる言語の領域だけの問題にとどまらず、行動上の問題や知的な遅れを内包していることも特徴である。複合的な問題の中で最も目立ってとらえられるのが言語であり、従って主訴としてあがってくる数が多くなることも考えられる。また言語の遅れは知的な遅れと関係が深いという考えが浸透しており、それが母親の不安を強くするようでもある。また子どもの生

母親の訴えにみる三歳児の諸問題

活史をふまえず、単なる比較の目で子どもをみる親が多く、個々の子どもの発達のパースを軽視した見方がされていることも考えられる。

また、言語の場合発達途上で消失していくと思われる事柄までも病的な遅れとしてとらえ相談に来る母親が多いことも特徴であろうと思われる。

さらに2位以下はくせに関すること、排泄に関することとなっており、育児への関わり方や躰に対する考え方が従来と変わり、子どものペースに合わせたすすめ方が

推奨され、母親も神経質にならず子どもの様子に合わせて無理なく行なうという態度が浸透してきた結果のあらわれであり、問題行動視する傾向が少なくなっているのではと推察される。

また、行動上の問題についても、偏りの大きな子どもの場合には、3歳を待たずに乳児検診という機会にホローされることが多くなり、年齢のごく低いうちから特徴的な症状があらわれ、第三者にその徴候が認められる場合は、すでに対応がなされていることが主訴の数が少ない

表2 領域別 母親の主訴

領域	言語	くせ	排泄	友だち関係	性格	恐怖感	睡眠	行動	その他	計
F	83	30	17	12	7	8	4	18	6	185
%	44.86	16.22	9.19	6.49	3.78	4.32	2.16	9.73	3.24	99.99
具 体 的 訴 え の 多 い 順 に 列 記 内 容	* 言葉が遅い(単語のみ2度文)	* 指しゃぶり 瓜かみ	ウンチをパンツにする	友だちと遊べない	言うことをきかない 反抗する 自己主張が強い	音をこわがる 暗がりこわがる トイレこわがる	寝つきが悪い 夜泣きする 寝言をいう 夜叫	* 落着きがない よくころぶ 食べない 人見知りする 公園まで一人でいけない	左きき テレビがない よだれが多い 測定をいやがる 食べない 臭いに弱い	* 左肩 男>女 P<.05 * 右肩 男<女 P<.05
	* 発音がはっきりしない 言葉がつかない ききとりにくい 赤ちゃん言葉を 使わない 言葉が少い 話さない 音を省略する 音の置き換えを する どもる 話し始めが遅い 言葉がすんなりでない 言葉がでない	オシヤブリを使う う 哺乳ビンを使う 舌を出す 唇をすう 一点をみつめる ハンカチが離せない スカーフをもつ オナニー	おねしょをする オシッコを教えない オシッコをパンツにする おもらし(昼間) オシッコが近い オムツがとれない	皆なと一緒に遊べない 姉と一緒に遊べない 友だちをたたく 友達がいらない 一人で遊べない	思うようにならないとすねる ケンカする	年長者をこわがる	母親のいうことを気にしすぎる よく泣く 甘えん坊 母親から離れない できることもや ってもらいたがる			

表3 主訴と諸要因との関係

要因		領域		言語	くせ	排泄	友だち関係	性格	恐怖感	睡眠	行動	その他	計
		F	%										
性別	男	F	64	14	8	8	4	6	1	10	5	120	
	%	53.33	11.67	6.67	6.67	3.33	50.00	0.83	8.33	4.17	100.00	64.85	
別	女	F	19	16	9	4	3	2	3	8	1	65	
	%	29.23	24.63	13.85	6.15	4.62	3.08	4.62	12.31	1.54	100.02	35.14	
計	F	83	30	17	12	7	8	4	18	6	185		
	%	44.86	16.22	9.19	6.49	3.78	4.32	2.16	9.73	3.24	99.99		
df = 8 $\chi^2 = 23.523$ P < 0.05													
面接	の初回	F	27	18	8	5	5	6	4	9	3	85	
	%	32.53	60.00	47.06	41.67	71.43	75.00	100.00	50.00	50.00	45.95		
計	継続的	F	56	12	9	7	2	2	0	9	3	100	
	%	67.47	40.00	52.94	58.33	28.57	25.00	0	50.00	50.00	54.05		
計	F	83	30	17	12	7	8	4	18	6	185		
	%	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00		
df = 8 $\chi^2 = 15.829$ P < 0.5													
きょうだい数				N. S									
母親との関係				N. S									

い理由の一つとしてあげられる。行政側、保働事業の年少時からのホローの成果とみてよいのではないだろうか。

また、表2をもとに主訴と他の要因との関連をみたものが表3である。

表3より特徴的なこととして、問題を訴え相談に来る子どもは男児が多いということである。昭和54年から58年までの3歳児の男女の構成比や、受診児の性別をみてもこのような違いは認められず、男児の方が女児より3歳の時点で問題の訴えが多いということがわかる、ただしこの時点での問題行動は母親との養育関係の中で症状をこじらせているといったものも多く、母子の円滑な関係が取り戻され、維持されることによって消失していくものも少なくないのである。

入室する母親から「男の子はよくわからないし……」という声をきくことがある。母親の関わり方の自信のなさや男の子らしさの期待からつい厳しい対応をしているということが背後にひそんでいることも考えられる。試行錯誤で不安を持ちながら養育される男児の方が様々な症状を顕在させていくのではないかと推察される。

また性別によって主訴に違いが認められる。つまり、男児の場合には言語の問題が53.33%で相談数の半分以上を占め、2位以下はくせ11.67%、行動の問題8.33%と、その比率はかなり少なくなっている。一方女児の方は言語の問題29.23%、くせ24.65%、排泄13.85%、行動の問題12.31%の順で、1位と2位の間、3位と4位との間にあまり差がなく訴えられている。子ども

の性別による母親の要求の違い、関わり方の違いなどが考えられる。

次に各問題ごとにいくつかの観点から考察をすすめていく。

言語領域に関する問題についてまずとりあげてみよう。言語の発達についてみると、生後2~3カ月頃からアウーという無意味の発声が行なわれ、5~6カ月頃には語りかけるような将来の言語活動の基礎となる喃語の時期を経て、1歳ごろにはマンマ、ブーブーという有意味語を話すようになる。いわゆる1語文の時期である。これは今までの音声に特定の意味づけをし、言語を実質的に獲得したことを意味する。

この1語文の時期を経て言量数の増加と文節的なまとまりを持つ2語文・3語文といった形態が整のってくる。文節的な表現が可能になると文の形をそなえた表現へと移項し、主語・述語をもった表現が完成されるのである。言葉が伝達の手段として用いられることが容易になる時期であり、その完成がほぼ3歳といわれているのである。おしゃべりが盛んになる時期でもある。その後はそれまでに培われた素地のもとに各品詞が備わっていったり、段落をもつ話し方の獲得、時間をふまえた表現などが加えられていきその充実がはかられていくのである。

言語の領域の問題は表4に示すように言語発達の量的質的な面の停滞に関する問題、発声に関する問題、どもるという側面に大別でき、停滞を示す子どもが最も多く

表4 領域別にみた諸要因との関係

問題領域	言語 (N=83)			くせ (N=30)				排泄 (N=17)				友だち関係 (N=12)	性格 (N=7)	恐怖感 (N=8)	睡眠 (N=4)	行動 (N=18)		
	言語発達の停滞	発音	どもり	指しやぶり	瓜かみ	ハンカチ等ににこたわる	その他	排便の失敗	排尿の失敗	夜尿					落ち着きがない	母親に依存	その他	
F	54	26	3	12	6	7	5	8	6	3	12	7	8	4	6	8	4	
%	65.06	31.33	3.61	37.50	20.00	23.33	16.67	47.06	35.29	17.65	100.00	100.00	100.00	100.00	33.33	44.44	30.77	
諸要因	性別	$\chi^2=8.851$ df=2 P<0.025		$\chi^2=16.014$ df=3 P<0.005												$\chi^2=9.639$ df=2 P<0.005		
	顔面接触															$\chi^2=6.831$ df=2 P<0.05		
要因	いきのよゆう無だ							$\chi^2=4.763$ df=2 P<0.10										
	か母か親の	$\chi^2=9.965$ df=2 P<0.01		$\chi^2=8.624$ df=3 P<.05														
	その他	始語期との関連 $\chi^2=19.314$ df=6 P<0.01		出現時期との関連 $\chi^2=7.962$ df=2 P.<0.05												乳児期の母親のかかわり $\chi^2=15.279$ df=4 P<0.01		
その他	自閉傾向を伴うケース4例 遅退傾向を伴うケース5例 聴力障害を伴うケース1例														自閉傾向を伴うケース2例			

特に男児にその傾向が強いことがわかる。

始語期との関係を見ると、発達途上で遅れをとり戻していくグループでは、始語期は1歳の時期が最も多く遅くとも2歳までには1語文が認められる。それに対し発達遅退を伴う言語発達の遅れを示すグループは1語文が2歳以降に集中しており、自閉傾向を伴う言語発達の遅れを示すグループは1歳から1歳半の時期に1語文が集中していることがわかる。

これは、自閉傾向のある子どもは彼ら独得の世界を形成しており、人との関わりを積極的にもととうとしない、個人個人の偏りの方向によってその特定の分野においては同年齢の幼児をしのぐ能力を発揮することがある。言葉も独自の意味内容をもつ記号としては有しており、内言とでもいうべき言語は早い時期から持ち合わせている。しかしそれが周囲の状況とは関わりなく、また一般的な意味内容とは異なる用いられ方をしている、音声として発せられるため母親はそれを1語文として理解することが多いためと思われる。発声器官に障害のない限り記号として発せられる音声は早い時期からもっている。マンマが必ずしも母親や食べ物と結びついていなくても、母親には言葉を話したと受けとめられ1語文の開始と意味づけられている。

しかしこれらの子どもたちの特徴を経過を追ってみるとそれ以後の言語の伸びがかんばしくなく、数える程度の単語しかないということがあげられ母親も不安に思うようである。

また遅退児についてみると彼らは言語に限らずすべての側面に関して発達が緩慢である。少しづつ成長の跡は伺えても他の子の成長のし方とは違うというところに母親の不安があり、1語文の時期が遅いということが一層母親の不安感に迫車をかけるようである。

年齢が低い場合、極立った特徴を示さない自閉傾向のある子どもや遅退傾向のある子どもは健常児との区別がつけにくく、多少の疑問をもちながら3歳まで母親も何の対応もせずきってしまうことがある。発達の様相がどうも他の子と違うという印象をもって、3歳位までを許容範囲としてその子なりの発達をみつめてきってしまうようである。

また環境上の問題で（例えば母親との関係に原因があると思われるもの）言語発達の停滞を示す子どもも多く認められる。しかし言葉の遅れが環境上の問題に規因していることを認識している母親は少ない。面接をすすめ

ていく中で日常の具体的な行動をとりあげ説明していくが態度の変容・意識の転換は困難であり、面接を重ねていくことが多く言語の領域に経過観察が多くみられるのもこのことに起因しているのである。

子どもの様子が好転していくのには時間がかかるが、母親の変容によって子どもがかわっていくケースは多く認められる。母親自身が問題の所在を理解する時期が転換期になっていくようである。

また特徴として、女兒の場合、母親との関わり改善や発達途上で解消されていく見通しのある遅れが多いことがわかり、始語期についてみても1歳から2歳までに認められる。

さらに発音の問題については、男児は9カ月から2歳1カ月が始語期となっているのに対し、女兒は9カ月から1歳6カ月とその幅が狭くなっていることも特徴としてあげられる。

内容については、男児に音の省略が認められるが女兒については認められず、また他の傾向は1語文の開始時期との関わりはなかった。

また、母親の接し方と言語発達との間に関係があるということから、母親の関わり方についてみると問題のあることが認められる。つまり言葉を教え込もう、遅れをとり戻そうとする態度が多く、子どもをよけい緊張させてしまう結果をうんでいると推察される。

子どもを受容することがまず大切であり、言語面の発達もそれによって助長されることを理解してもらうことが大切であろうと考えられる。

次にくせについてみる。くせは大別して指しゃぶり・爪かみ・ハンカチやスカーフといった物への固執に分けられる。それと他の要因をみていくと性別と母親の関係との項目に有意差が認められる。指しゃぶりは女兒に多く認められ、ハンカチ等の物への固執は男児に多くみられた。指しゃぶりや爪かみなどは心理的な不安定感のある時や欲求不満の際に生じやすく、気持を安定させることや活動性を高めることによって解消されることが多いのである。母親の対応もそれをふまえ、不満状態をつらせないようにすることが必要である。止めさせることに注意がいき、行動の原因を考えない対応の仕方は逆に行動を強化させてしまうことにもなりかねないのである。

また指しゃぶりと爪かみを比べてみると、指しゃぶりは入眠時に最も多く認められ、爪かみは集中している時

期がなく平均的にいつでも認められる傾向が示された。つまり指しゃぶりは一つの儀式的なものとしての意味をもつ行為であり、爪かみは必ずしもそうとは言えず、むしろ緊張感やストレスからの解放を意図して行なわれる性質の強い行為ではないかと推察される。同じ身体に依存する行為でもその必要性・子どもの要求の次元は異なるようである。

次に行動に関する問題についてみてみよう。行動は落ち着きがない行動と母親への過度の依存行動がみられる。落ち着きがないという行動は男児に多く認められる。内容をみると、視線が合にくいとか、人への関心が薄いとか、母親をあまり必要としないなど、自閉傾向を有するものが若干認められる例もあり、単純に考えることのできない側面をあわせもっている。

また面接回数との関連も強く、経過を追って何度か面接をすることも多い。

さらに乳児期の母子の親密度との関連をみると、落ち着きのない様子を示す場合には乳児期の母子関係が稀薄であることが多く、必要以上に依存性である場合には密着度が高いことがわかる。稀薄であると人との関係の持ち方を十分学習することができず、人への関心も弱くなり、親密なままだこかでうまく母子分離の体験をしそこなうといつまでも依存的になってしまうことが示唆される。

また排泄に関する問題については排便に関する問題と排尿に関する問題が含まれている。新生児期や乳児期の15~20回という排尿回数も泌尿器の機能の発達によって1歳半から2歳半頃には予告ができるようになる。夜尿に関しては5歳までは許容範囲とみてよいとされている。排泄に関することと他の要因との関連をみると、きょうだいの有無が関わりのあること、母親の態度が関わりのあることが認められる。躰の1つとしてトイレトレーニングを厳しくしたり、必要以上に神経質になることは子どもに緊張感を与え、それでまた失敗をくり返すという悪循環をつくり出す元凶となっていくと察せられる。また、きょうだいの存在によって母親の接し方が少なくなると自分にも手をかけてほしいという欲求を排尿・便の失敗で表現するのであると考えられる。子どもの行動の背後にある真の欲求を汲みとった接し方が大切であることが示唆される。

## 要 約

3歳児の幼児をもつ母親の主訴をもとに問題行動をと

りあげ考察をすすめたところ以下の点が明らかにされた。

1 母親が問題行動としてとりあげるものに言語に関するものが最も多く、特に男児において顕著である。

2 言語の問題の中でも言語発達の停滞についてのもものが最も多く、単なる発達の停滞、他の問題を含んでいるものなど様々な次元のもものが認められる。その傾向も男児に多く認められる。

3 問題行動の中で性差の認められたものに言語に関する問題・くせに関する問題・行動上の問題があり、母親との接し方による違いが認められたものに言語・くせに関する問題があり、継続的な面接が必要とされるものに言語・行動上の問題がある。きょうだいの有無は排泄に関する問題について関連が認められた。

また始語期と言語、乳児期の母子関係と行動上の問題に関連のあることも認められた。

## おわりに

子どもは様々な特徴をもっており、母親の意識や文化社会の違いにより問題視される行動は規定されてくる。しかし特定の生活圏で生活していくためにはそこにあった行動様式を獲得していくことが大切であり、その過程に何らかの理由で適応できない子どもにはそれが順調にはかられるよう援助していくことが必要であろうと考える。胎生期から積み重ねてきた個人の歴史のうえに各自の最良の姿に向っての歩みを助長するよう援助することが大人の責務である。

子どもの健全な成長・発達を願い、望ましい方向へ伸びていけるように節目をとらえ問題の早期発見・解決がはかられるよう環境上の問題の調整とともに、子ども自身の抱える問題の明確化をはかり、その子どもにとって望ましい環境を設定していくようにしたいものである。

今回の結果をふまえ、子どもをとりまく諸要因について今後一層の考察をすすめていくと共に、3歳の時点で問題行動を示した子ども達のその後のフォローアップについても考えていきたいと思う。

最後に本研究の資料収集にご協力いただき、つたない面接を受けてくださった皆様、ならびにまとめるに際してご助力いただきました宮崎先生・後藤先生はじめ研究室の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 船川幡夫他：3歳児（第3版）医学書院 1983
- 堀田之：乳幼児期における育児環境と言語発達に関する研究 小児保健研究 41(3)pp.211～217  
1982
- 稲毛教子他：乳幼児の発達心理 大日本図書 1980
- 河合隼雄他：親と子の絆 創元社 1984
- 黒丸正四郎他：新生児 NHKブックス 1978
- 平井信義：しつけ無用論 くもん出版 1977
- 田口恒夫他：言語発達の遅れ 日本文化科学社 1981
- 田口恒夫他：ことばを育てる 日本放送出版協会 1979
- 友久久雄：人生最初の矛盾 発達 7 ミネルヴァ書房  
1981
- 日本小児保健協会：昭和55年度幼児健康度調査報告(抜萃)  
小児保健研究 40(4) 1981
- 田中昌人：3歳児の精 発達 7 ミネルヴァ書房  
1981